

遠藤鋼機株式会社 取締役副社長

えんどう りさ
遠藤 理紗氏

技術と人を磨き続けて100年。 生活を支える社会インフラに貢献



PROFILE

1989年生まれ、新潟市出身。早稲田大学を卒業後、明倫短期大学に入学し、言語聴覚士の資格を取得。病院に勤務した後、父である先代社長の要望を受け、2020年 同社に入社する。2024年 先代社長の逝去に伴い取締役役に就任。2025年 取締役副社長に就任する。

創業100周年を迎えた遠藤鋼機は、ダムや河川・水力発電所の水門、各種機械設備の受注生産をはじめ、建設工事に関わる鋼材などの販売を手掛ける企業。人々の生活を守る社会インフラ、エネルギー産業に貢献する同社の遠藤副社長に、お話を伺いました。



遠藤鋼機株式会社

〒950-0034

新潟市東区浜谷町1丁目16番1号

TEL:025-274-3211

<https://www.endokoki.co.jp/>

社員それぞれに個性があるので、一人一人の強みを大事にしたい。みんなの強みを合わせることで力が発揮できると思っています

設計から製作、保守まで一貫体制。 自然災害時に迅速な対応も

遠藤鋼機は1926年、土木機器・器具・鋼材を主に販売する遠藤商店として創業。その後、荷役機械や土木機械などの製造事業を開始し、現在はダムや河川、水力発電所向けの水門・除塵機・水圧鉄管などの設計・製作・現地据付から保守・修繕まで一貫体制で行っている。「もともと保守・修繕は別会社が行うのが一般的だったようですが、自社製品を一番理解している私たちがそこまで担うことで、より優れた製品の提案をしていけることも一貫体制の強みだと思います」と遠藤副社長。また、保守点検や修繕まで手掛けることで、自然災害時の応急・復旧にも迅速に対処できるという。「生活に関わる社会インフラなので、お客様と日頃から密な関係を築き、緊急時にはすぐに対応できるようにしています」。

顧客や地域との信頼関係を重視。 SDGs達成に向けた取組を推進

創業から変わらず大切にしてきたのは、「お客様や地域との繋がり、信頼関係を一番重視してきたという印象があります」と遠藤副社長。100年という歴史を振り返ると、卸売から機械製作へ、さらに昭和30年代から水力発電所建設に伴う製品を主力に事業の舵を切ったことが、会社として大きな転機になったのではと語る。

こうして時代の変化に対応してきた同社は近年、SDGsの取組を推進。「取組を通して“自分たちは社会インフラや再生可能エネルギーに関わっている”という意義を社員が認識することに繋がって



増水した本流からの逆流を遮断し、街を浸水被害から守るために設置された「極門ゲート」。



河川や水路のゴミを取り除く「除塵機」。レーキ（熊手）で水中の塵芥を掻き揚げ、設備の故障や詰まりを防ぐ役割を担っている。

いると思います」。

社員が働きやすい会社に。 次世代への技術継承も重要なテーマ

新潟商工会議所では、初代・遠藤作治氏、2代目・整治氏が副会頭、3代目・聡一氏が工業部会副部長、4代目・川勝修二社長が現在議員を務めるなど、歴代社長が要職を歴任。今年2月には遠藤副社長が女性会に入会した。「活躍されている女性経営者の方々と交流させていただくことで、学びや気づきを得たいと思い入会しました。また、商工会議所さんには、私の知らなかった先代たちの一面を教えていただくこともあります」。

社員の働きやすさを促進する施策にも取り組み、2022～2025年度の4年間で社員男女とも、育児休業取得が100%に達するなど効果も表れている同社。社員がやりがいを持って働ける環境を整えながら、今後は技術の継承に力を入れていきたいという。「社内で培ってきた技術を、どのように次の世代へ確実に繋いでいくかが一番重要なテーマです。人が減少していく時代なので、いかに効率よく、持続可能な形で進めていくかが大切になっていくと思います」と遠藤副社長。これまで積み重ねてきた技術・ノウハウを基盤に、今後も社会資本の整備やエネルギー産業に貢献していく。



組織はチーム制を採用。チームリーダーとチーム員というフラットな関係にすることで意見を出しやすい雰囲気が生まれ、業務の迅速化にも繋がる。